

協力



プログラミングを学んで
ゲームを作ろう!



インタビュー
体験したよ!

粘土で作った
キャラを動かして
撮影しよう!

「コンピュータプログラミング体験」



「オリジナルキャラクターでクレイアニメを作ろう!」

観光コースを作り
英語で外国人に
紹介しよう



「大阪の魅力再発見」

めざせ★声優!
実際にアニメの
アフレコに挑戦!



「アニメ声優にチャレンジ!」

こども 夢・創造 プロジェクト

ドキドキの
記者体験…!

こども新聞記者

2015年度 第3期
参加者募集!
&
こども新聞記者
活動報告



「スポーツアカデミー」

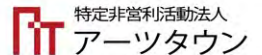
「こども 夢・創造プロジェクト」は、
さまざまな分野の「プロフェッショナル」を講師にむかえ、
小・中学生のあこがれの分野や技術、作品づくりなどを
本格的に体験できるプログラムです。
プロフェッショナルの世界を実際に体験する貴重なチャンス!
「おもしろそう!」「やりたい!」その気持ちがあればOK!
自分の新たな才能に気付くかも!?
どんどん参加してみよう!!

アスリートから
トレーニング
方法を学ぼう

「こども 夢・創造プロジェクト」は大阪市と民間企業・団体の協働により実施しています。

実行委員会 (2015年度)

実行委員長 今西幸蔵 (神戸学院大学人文学部教授)



協力団体 (2015年度・順不同)

- 読売新聞 大阪芸術大学附属大阪美術専門学校 JAM 学校法人 大阪創都学園 大阪アニメーションカレッジ専門学校 Jam ECCアーティスト報 大阪文化服装学院 6 [rock] woodworks & life
- om 大阪バイオメディカル専門学校 ヤンマースタジアム長居 / ホスピタリティ ツーリズム専門学校大阪 / エール学園 / 清風情報工科学院
- 特定非営利活動法人 書道スーパーキッズの会 / 大阪マラソン組織委員会 / アナ・トーク学院 / 株式会社 よしもとクリエイティブ・エージェンシー
- アカルスタジオ / 大阪市消防局 / 株式会社 ジェニー / 大阪工業技術専門学校 / 一級建築事務所 重山建築研究室 / 大阪市こども青少年局

オレちたちに
会いにきてナン!



読売新聞・夕刊で好評連載中!

「オリジナルスクラップブック」も登場!
ご希望の方にもれなくプレゼント!

スクラップブックは、朝夕刊セットの購読者に限り
差し上げています。※お申し込みが必要です。



お申し込み・お問い合わせ 0120-4343-81 まで

2015年度 こども新聞記者

活動報告



今回の「こども新聞記者」には、小学4年から6年までの男子3人、女子6人の計9人が参加し、10月25日に開かれた第5回大阪マラソン取材し、記事にまとめました。当日は、チャリティアンバサダーでフルマラソンを完走した山中伸弥さん、市民ランナー、ランナー盛上げ隊!の皆さんからお話をうかがいました。この日は近畿地方に「木枯らし1号」が吹き、屋外の取材では手がかじかむ寒い一日となりましたが、記者たちは元気よく活動しました。大会前日には、大阪マラソンEXPO(エキスポ)2015ではボランティアの方たちの取材もしました。ご協力をいただいたみなさん、ありがとうございました。(文中の肩書き、年齢は取材時のものです)

4年	5年	6年
とむら 遠田 彩乃	さや 戸城 沙耶	あかね 岡本 咲良
ななか 中川 中野	はるか 橋本 菜璃奈	なまき 名古 さくら
	あまの 山川 晃平	よしか 吉岡 陸

こども記者名簿

1 ボランティア

大阪マラソンを支えるボランティア。今回は大会前の10月22日からレース当日の25日まで、約1万人が大会運営に協力しました。こども記者たちは、24日、インテックス大阪の、ランナー受付会場で参加者にゼッケンなどを配る仕事をしてきたボランティアを訪ねました。今回からは、中学生もボランティアができるようになり、早速参加したという中学2年の家原珠利さんをはじめ、母親の優子さん(39)、永田敦敏さん(51)の3人が取材に応じてくれました。



橋本菜璃奈撮影

永田敦敏さん(51) これからもボランティアをしたい

永田さんは会社員で、ふだんはジムに通ってトレーニングをしているそうです。大阪マラソンのボランティアは初回の2011年から続けており、娘さんが新聞広告をみていっしょに応募しました。2回目からは一人でやっているということです。(山川記者)
永田さんに気をつけていることをたずねると、「人のはなしをしっかり聞いて、受け答えすること」と教えてくれました。参加してよかったことをたずねると、「ランナーのみなさんと話していて、勉強になることが多いことです」と話していました。これが5年連続でボランティアをしている理由だと思います。(吉岡記者)
永田さんは5回目の参加です。ボランティアを始めた理由は、むすめさんが応募したいといい、自分も参加することにしました。「体がもつかり、これからもボランティアをしたい」と話していました。ボランティアの服装や帽子についても教えてくれました。(橋本記者)
永田さんは5年前からずっとボランティアに参加してすごいなあと思いました。このボランティア以外では、映画のお手伝いをしたこともあるそうです。(岡本記者)



山川晃平撮影

家原珠利さん(中2) 優子さん(39) 「ありがとう」がうれしい



遠田彩乃撮影

家原優子さんは、次女の珠利さんが昨年、「こども新聞記者」に参加してランナーの熱気を感じ、自分も何か手伝えることがないかと思い、ボランティアに応募しました。(名古屋記者)
家原珠利さんは、ボランティアをしていてうれしいのは、ランナーから「ありがとう」と言われたときだそうです。大阪マラソンのみならず、「活気があるところ」といってくれました。(中野記者)
「ボランティアのやりがいは」と聞くと「ランナーから感謝の言葉をいわれたとき」と家原珠利さんは答えてくれました。家原さんの服についているハートマークは、AEDの講習を受け、心臓が停止した人を蘇生することができる人を示しています。(中川記者)
家原優子さんにボランティアをしていてうれしかったことやびっくりしたことを聞くと、ランナーに「がんばれ」というと、笑顔になってくれるところといい、サルのすがたをしたひとや大きなアフロヘアの人がいてびっくりしたということです。(遠田記者)
家原珠利さんに「大阪マラソン以外にボランティアをしていますか?」と聞くと「淀川の花火大会のごみそうじを1回したことがあります」と言っていました。(戸城記者)

2 チャリティアンバサダー 山中伸弥さん



大阪マラソンは、参加するすべてのランナーや市民とともに、チャリティ文化の普及に力をいれています。今年の大会も、9人の著名人がチャリティアンバサダーとして広く協力を呼びかけました。こども記者は、その一人で、今回フルマラソンを完走したノーベル賞受賞者の山中伸弥さんにインタビューし、参加した感想やマラソンへの思いを聞きました。



～山中さんと一問一答～

— 今回のマラソンの結果を自己採点すると何点ですか? —
70点ですかね。最後の2kmは本当に苦しかったです。ちょっとペース配分を間違えたね。でもコースは100点でした。
— 僕は山中先生におこがえていて、将来、研究者になりたいのですが、研究にはお金がかかるんですか? —
大阪マラソンはチャリティイベントですが、研究も多くの皆さんの協力が必要です。研究にはいろんな材料を使ったり、または新しい薬を作り出すので、たくさんのお金がかかります。ぜひ研究者になって協力してください。
— マラソンの前日はどんな気分でしたか? —
いつも前日はちゃんと走れるか心配で寝付けないのですが、アメリカから帰国したばかりで時差もあって、ぐっすり眠れました。でも心配でした。
— アメリカでも日本からシューズを持参して練習をしていると聞きましたが、そのシューズで走ったのですか? —
今日のシューズは大会用に作ってもらったもの

です。アメリカではよく練習するのでシューズは置いたままです。ただ、ほかの国に行く場合は必ず日本から持参しています。
— 山中先生にとって大阪マラソンとは何ですか? —
難しい質問ですね。生まれ故郷で走るマラソンですからやっぱり気持ちがいいですね。沿道の応援もどぎれることはありませんし、楽しいです。
— 山中先生の趣味と日課を教えてください。 —
趣味は走ること、日課もやっぱり走ることですかね。(笑)



○山中伸弥さんのプロフィール
1962年大阪生まれ。米国グッドストーン研究所に留学し、人工多能性幹細胞(iPS細胞)の発見につながる研究を始めた。2006年に世界で初めてマウスiPS細胞の作製に成功し、翌年にはヒトiPS細胞の作製にも成功しました。その功績によって2012年12月ノーベル生理学・医学賞を受賞しました。現在、京都大学iPS細胞研究所所長・教授としてさらなる研究を行っています。



練習が不十分だったので、30点減点。でも、自己ベストが出たので70点

全力を出し切った、と話していましたが、タイムは納得いかなかったようです。「研究も何十年とかかりますが、同じようにマラソンもがんばりたい」と話してくれました。(橋本記者)
前回のタイムより30秒しか伸びていないのがやしかったようです。「夏明けでマラソンを走る体になっていなかったからですかね」と答えていました。マラソンって甘くないんだ、と思いました。(中野記者)



最後の2kmは「へろへろだった」そうです。大阪マラソンはいろんな人と話しながら走れるから楽しい、ただし30kmまでだけど、と話してくれました。(遠田記者)
マラソンはペース配分が大切だと改めてわかった、と話していました。大阪マラソンのいいところは、応援してくれる沿道の人が途切れないことだそうです。(名古屋記者)
走る前の晩はどんな気持ちでしたか?と尋ねたら「緊張して眠れるかなと思いましたが、アメリカから帰ってすぐなので、眠れた」と話してくれました。(戸城記者)
マラソン前日の夜は、長い距離を走れるか心配だったそうです。私も何かある日の前日はドキドキして眠れないことがありま

す。山中先生もすごくドキドキしていたんだなと思いました。(岡本記者)
大阪生まれの大阪育ちで、その町を走っていて気分がよかったそうです。最後の2kmはとても疲れて気分が悪くなったそうですが、完走できてよかったとうれしそうに話していました。(山川記者)
ノーベル賞をとったこともある人に話を聞くことができるので、前日は一睡もできませんでした。質問すると、笑顔で答えてくれました。とても素晴らしい人だと思いました。(中川記者)
大阪マラソンを自己評価してもらったら、「練習が不十分だったので、30点減点。でも、自己ベストが出たので70点」と話していました。今回のマラソンはとても楽しめたそうです。その話を聞かれて「応援が絶えなかったから」とうれしそうに答えていました。(吉岡記者)

3 ランナー盛上げ隊!

「奈都乃チアアカデミー」

様々なパフォーマンスでランナーを応援する「ランナー盛上げ隊!」の会場がコース沿い15か所に設けられました。こども記者たちは、大阪市中央区の北浜ネクスビルディング前で、大阪エヴェッサなどプロバスケットボールbjリーグでチアリーダーを務めた奈都乃さんが主宰する「奈都乃チアアカデミー(NCA)」のメンバー43人の演技を取材しました。NCAは今年2月、全米最大級のチア&ダンスイベント「ジャムフェス」アメリカ大会で選抜チームが優勝しました。

終了後、メンバーの三上夢里亜さん(中2)横山未侑さん(中2)大野ひまりさん(小4)伊賀光希さん(小2)が記者の質問に答えてくれました。



橋本菜穂奈撮影



三上夢里亜さん(中2) チームの仲間達といろいろ分かち合える

三上さんにすてきな笑顔の秘訣をたずねたら「チアをしていると自然に出てきます」とにこやかに答えてくれました。チアのすばらしさは「チームの仲間たちといろいろなことを分かち合えること」だそうです。たとえば、練習を続けても気持ちに体がついてこない苦しさ、大会に出てがんばって結果を出せた時の喜び…。ますますチアのすばらしさがわかりました。チアリーダーでない僕からも何か元気を届けたいと思いました。(中川記者)



中川記者撮影

横山さんは小学2年生からチアリーダーをしています。友だちに誘われてやってみたら、おもしろかったそうです。ふだんの練習を聞くと、柔軟体操や筋トレのようなことを週2回やっていて、練習時間は長い時は5時間にもなるそうです。チアリーダーをやったのは「達成感を味わえること」だそうです。風でポンポンが飛んでいたり、冬場でも半袖の衣装で寒いことなど、大変なこと、困ったことも多いけど、チアリーダーを続けていきたいと答えてくれました。(吉岡記者)



山川記者撮影

横山未侑さん(中2) チアリーダーを続けていきたい

大会の日は風が強く、大野さんに「寒くなかったですか?」と聞いたら、「寒いけど、笑顔でやらないとダメだから…」と答えてくれました。ダンスが好きなのも「笑顔で楽しく踊れること」だそうです。決まりのポーズは両手を腰にあてた「アテンションです」と教えてくれました。みんなの演技は息ぴったり。心をひとつにしたいいけないので「すごい」と思いました。(戸城記者)



中野記者撮影

大野ひまりさん(小4) 笑顔で楽しく踊れるダンスが好き

伊賀光希さん(小2) 将来の夢はチアの選手



伊賀さんがチアを習おうと思ったのは、「テレビで見てかっこいい」と思ったからで、幼稚園の年長組から始めたそうです。1週間に10時間も練習するチアガールのみなさんは本当にすごいです。大阪マラソン当日は寒かったけど、「去年よりうまくおどれた」とうれしそうに話していました。将来の夢もチアの選手になることだそうです。(名古屋記者、橋本記者)

(名古屋記者、橋本記者)

4 市民ランナー

今回の大阪マラソンには42.195キロのフルマラソンに3万459人、8.8キロのチャレンジランに1854人の計3万2313人が参加しました。こども記者たちは、フルマラソンのゴールとなるインテックス大阪で、完走したばかりのランナーの皆さんから、喜びの声を聞きました。



塩見愛さんは4回目の参加です。完走した時は「やっと終わったあ」と笑顔を見せてくれましたが、走っている時は「明日はお休みだったらいいのになあ」と思っていたそうです。職業を聞いたら「実は小学



戸城記者撮影

塩見愛さん 来年はコマさんで

校の先生です」とわかって、びっくりしました。来年出場できたら「妖怪ウォッチに出てくるコマさんのかっこうで出たい」と言っていました。(中野記者、戸城記者)

「健康のためにマラソンを始めた」という藤原裕史さんは1km6分のペースで走っていましたが、坂のある35kmから7分のペースに落ちて完走しました。途中、何度もや



吉岡記者撮影

藤原裕史さん 沿道の応援で元気が出た

めようと思ったのですが、「沿道の両側からたえず応援をもらって元気が出た。来年も出たい」と話していました。(山川記者)

児玉晃子さん、斉藤葉子さん、国分さやかさんは3人仲良くハチのかっこうで完走しました。去年と同じハチの姿で走ったのは「わかりやすく、応援してもらえる」からだそ



名古屋記者撮影

児玉晃子さん 斉藤葉子さん 国分さやかさん マラソン仲間でハイテンション!

うです。児玉さんは歯科衛生士、斉藤さんは美容師、国分さんは主婦ですが、マラソンを通じた仲間だそうです。疲れているのに、ゴール後もハイテンションでした。(遠田記者)



名古屋記者撮影

中村民子さん がんばっている姿を見せたい

いる娘さんも走りましたが、「私の方が速かった」そうです。(遠田記者)

吉田彰宏さんは「ぐでたま」の仮装で完走しました。どのあたりから疲れてきたか、と聞いたら「疲れてません!」という答えが返ってきました。なぜ参加したのかと聞くと「走った後の達成感を味わいた



吉田彰宏さん 疲れてません!

かったから」と話していました。また走ってほしいな、と思いました。(中野記者)

八子圭一さんは埼玉県から参加ですが、フルマラソンは今回で4回目です。ふだんビルの20階にある仕事場まで階段を上って足腰を鍛えているそうです。「目標の4時間が切れなかったで、自己評価は



八子圭一さん 楽しさ100点満点

70点。でも楽しさで言ったら100点満点でした」と話していました。(山川記者)

トラの帽子をかぶった富島庸好さんに「なぜ42.195kmという途方もないフルマラソンに挑戦できるのですか」と尋ねたら「走るのがとても楽しいからです」と答えてくれました。この言葉にとても勇



富島庸好さん 楽しいから走る

気ももらいました。どんなにつらいことでも楽しければ乗り越えられるということが分かったからです。果敢に挑戦するランナーのみなさんに勇気の使い道を教えられました。(中川記者)

おそろいのランニングシャツで走っていた奥立優さんと小林健勇さんは同級生です。奥立さんは2年前、小林さんは4年前から参加しています。奥立さんは「8月は暑くて満足に走る練習ができなかつ

小林健勇さん 奥立優さん ノーベル賞受賞者の山中伸弥さんと一緒に

た」と話していました。小林さんはノーベル賞受賞者の山中伸弥さんと途中、12.3kmほど一緒に話しながら、走っていたそうですが、30kmあたりでペースダウンして、山中さんと離れてしまった、と話してくれました。(岡本記者)



岡本記者撮影